

## 共同研究プロジェクト「東アジアの社会変容と国際環境」研究会 2007年度第1回

「研究セミナー：文書に残す—非漢人社会における文書書式と契約概念の変遷—」

日時：2008(平成20)年3月8日(土)、午後1時より6時

場所：AA研3階大会議室(303)

報告者と報告タイトル：

### A. 新疆

堀 直(甲南大学)

「清代のチャガタイ語文書—回疆を中心として—」

菅原 純(AA研共同研究員、AA研産学間連携研究員)

「イスラーム法から中国法へ—省制期新疆の地契書式にみる「契約」の問題—」

\*新免康(AA研共同研究員、中央大学)：上記2報告へのコメント

### B. モンゴル

萩原 守(AA研共同研究員、神戸大学)

「清代モンゴルの満蒙文文書—公文書と私文書の間—」

広川佐保(新潟大学)

「民国から満洲国時期に至る蒙地関係文書の変遷とその意味について」

\*ブレンサイン(滋賀県立大学)：上記2報告へのコメント

### C. 西南中国

武内房司(学習院大学)

「18~19世紀貴州苗族民間文書とその周辺」

### D. 総括討論

岸本美緒(AA研共同研究員、お茶の水女子大学)：中国史研究者からのコメント

“文字にしるす”とは、古来、文字社会であるならば、どこでも普遍的にみられる現象である。しかし歴史学的観点に立つなら、“writing”といっても、“記録に留める”と“文書に残す”では、いささか意味がことなる。前者は、なんらかの体験した事実と記憶を保存することであり、後者は社会的契約事項を書く、といったニュアンスがおおきい。今回の研究会では、清朝統治下の非漢人社会(新疆、モンゴル、西南中国)において、“文書に残す”という行為がどのような言語により、いかなる書式で書かれたか、さらに清朝末期から民国時代に入り漢人勢力の拡大とともに、どのように変遷したか、という問題を討論した。チャガタイ語契約文書、某氏旧蔵熱河省蒙地契約関係文書の展示もあわせておこなった。